

区分	視点	問題点	
Ⅲ. 経済的課題	(1) 開発費用が掛かりすぎる・内容が不透明	<p>➢ 他の研究開発と比較すると費用が突出している。これまで2兆円もの国費を投じた成果が無い。「もんじゅ」の維持費200億円は掛かりすぎである。</p> <p>➢ 成果の説明も無しに今後、完成するのが40年後では、年間400億円もの大金を投じ続ける理由は無い。</p> <p>➢ 国の機関である JAEA が開発主体となっていることから、開発者の興味を優先した個別研究を寄せ集め、開発者特有のコスト感覚で進められ、費用の削減や計画の合理化を行う意識が無いのではないか。</p>	
		<p>➢ 高速炉の建設費、運転費は、軽水炉と比較して高いのではないか。</p> <p>➢ 発電コスト全体で見ても、高速炉は高いため、導入されないのではないか。</p> <p>➢ ナトリウム冷却炉では定期検査が長期化する。</p> <p>➢ ナトリウム冷却炉では運転維持費用が容易に低減できない。</p> <p>➢ ナトリウム冷却炉ではトラブル発生時に復旧が長期化する（目視による内部の観察が容易でない、高温環境）。</p> <p>➢ 廃止費用が LWR に比較して高価ではないか。</p> <p>➢ 外部コスト（政策的投資、研究開発費）を考慮すれば、経済性（発電コスト）は悪くなるのではないか。</p>	
	(2) 高速炉サイクルは経済的に成り立つとは思えない	<p>➢ ナトリウム冷却炉による CO2 削減効果、資源節約効果といった社会的メリットが明確でない。</p>	

区分	視点	問題点
IV. 開発の 進め方・体 制	(1) 開発の進捗が遅い	<ul style="list-style-type: none"> ▶ これまでの長計、大綱における実用化時期が遅れていたのは何故か。
	(2) 開発ステップ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 中国や韓国等は、実験炉、原型炉、実証炉という段階を踏まずに開発する計画だが、我が国だけが実験炉⇒原型炉⇒実証炉⇒実用炉といったリニアモデルに固執すること自体が誤りではないか？ ▶ アメリカの様に、基礎・基礎研究レベルで進めながら、将来、その時代の既存技術を用いて、改めて二ースにあつた大型炉を作るといったステップで実用化できないのか。
(3) 開発の進め方・成果について透明性が低い	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 高速炉開発を進めるには国民の合意形成が必要であるが、開発の進め方や成果について国民に十分な説明も無く、国や研究開発の当事者は説明責任を十分に果たしていないのではないか (情報公開)。 	
(4) 評価制度＋計画の柔軟性・社会性	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 研究開発の進捗を定期的に評価する仕組みが形骸化し、形式的な進捗確認にとどまり、第三者の目によって効率的・効果的に研究開発計画を厳しく査定する機能が存在していないのではないか。 	
(5) 経済性至上主義が開発に歪を生じさせている	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 電力自由化によりコスト目標達成ばかりに目が向けられ、実用化の見込みの無い革新的な技術を取り入れているのではないか。 	
(6) 開発の進め方が閉鎖的で開発者の広がりや小さくない、責任体制や規模の妥当性が不明	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 三菱重工工業1社を中核として、国内で研究開発を推進することが、大学、研究機関、三菱以外のメーカーとの協力を排除しているのではないか。 ▶ 産業の裾野部分(汎用機器・装置)の育成、維持システムを整備すべきではないか。 ▶ 五者連名とすることで責任の所在を曖昧にしているのではないか。実用化を目指す開発規模として適当か。 ▶ 五者が密室で研究開発・実用化の方向性を決め、三菱のみに開発を任せる体制は、原子力村の閉鎖的体質、秘密主義そのものではないか。 	